



県中いわて

令和元年8月1日 / 第247号

●発行 / 岩手県中学校長会 ●代表 / 小野寺昭彦 (盛岡市立下橋中学校) ●事務局 / 〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9 (盛岡市勤労福祉会館2F) / 電話019(622)0572 ●印刷 / 杜陵高速印刷 / 電話019(651)2110

令和元年度 第69回東北地区中学校長会研究協議会秋田大会

大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」

東北地区中学校長会研究協議会秋田大会が、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」の大会主題のもと、6月27日(木)と28日(金)の2日間にわたり、秋田県秋田市の秋田市文化会館において開催された。

東北各県から約800名の会員が秋田県秋田市に参集し、新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てるための具体的な方策を究明することとともに、東日本大震災及び原発事故からの復興や防災教育の充実を目指しながら、東北地区中学校教育の一層の充実・発展に向けて、活発な意見交換、情報交流が行われた。

第1日は、開会式と全日中報告が行われた。開会式で東北地区中学校長会の石郷岡仁司会長は、「今回の大会は元号が令和と改まってから初めての大会となり、東北地区中学校長会としても新たな一歩を踏み出したことになる。中学校教育で取り組まなければならない課題は多岐にわたるが、私たち校長はその変化を敏感に感じ取り、一つ一つの課題に真摯に向き合い、日々の教育に邁進していかなければならない。今回の秋田大会において学校における働き方改革を『宣言・決議』の中に明確に位置付けることにした。子どもたちのために何が必要か、そのために何に取り組まなければならないかを明確にし、校長としてのリーダーシップを発揮してしっかりと取り組んでいきたい。また、この大会をとおしてあらためて『東北は一つ』という強い絆を深める貴重な機会としたい。」と挨拶した。



【開会式で挨拶する石郷岡会長】

続いて、秋田県教育庁教育次長、秋田市長、全日中会長の3人が祝辞を述べた。

その後、全日中の川越豊彦会長が、「全日中の目的、組織、活動方針と重点、活動内容の紹介」「全日中教育ビジョン」「働き方改革の調査結果概要」等について報告した。

第2日は、研究協議会(分科会)と記念講演、閉会式が行われた。分科会は、「地域との連携・協働による『チーム学校』の実現」、「多様化



【全日中報告をする川越会長】

した学校教育課題に対応できる教員の育成」、「自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実」の研究題のもと、熱心な協議が行われた。本県からは、「チーム学校の実現」について「復興・防災教育の実践と校長のかかわり～各校の特色を生かした復興・防災教育の継続・発展に向けた工夫・改善～」のテーマで、「校長のかかわり8つの視点」を提案する内容を大船渡市立吉浜中学校村上誠校長が発表し、同末崎中学校多田喜夫校長が司会を務めた。



【分科会で発表する村上校長(左)と司会の多田校長(右)】

続いて、「踊る。秋田」フェスティバル・ディレクターの山川三太氏による記念講演が「秋田の偉人石井漠と土方巽～無形文化遺産による地域活性化と学校教育～」と題して行われた。秋田が生んだ偉人の業績と舞台芸術(舞踊)の映像を紹介しながら、「スタイルや形をまねるのではなく哲学を学び受け継ぐことが大切。これは教育も同じであり、どんな人間に育てたいのが大事。そのためにも『異なる価値観』との出会いは重要であり、自分を見直す契機になる。『踊る。秋田』はその異なる価値観との出会いの場。子どものうちから本物に出会わせ、本物を見て、体験することを大切にしてほしい。」と話した。講師の活動から、地域活性化の在り方と教育や人づくりについて考える貴重な講演であった。

閉会式では、次期開催地の青森県の川井副会長から、次年度は青森県青森市において開催する旨の挨拶があり、来年6月の再会を誓い、2日間の全日程を終了した。

宣 言

今日、我が国の教育は、人格の完成を目指し、伝統と文化を尊重するとともに、豊かな人間関係で満たされている社会を創るたくましい日本人を育成する使命を担っている。

私たちは、教育基本法、学習指導要領等の趣旨を踏まえ、新しい時代の変化や諸課題にも対応しつつ、確固たる信念と自負を持って全日中教育ビジョンに基づく学校からの教育改革を推進し、新たな中学校教育の創造に努めなければならない。

東北地区中学校長会は、中学校教育のさらなる充実を目指して、教育改革の推進と当面する諸課題の解決に努め、東北各県民の信託に応えていくことを宣言し、以下の事項を決議する。

決 議

- 一、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」とともに、「よりよい社会を形成する力」の育成に努める。
- 一、全日中教育ビジョンを踏まえ、特色ある教育課程を編成・実施・評価・改善し、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」の育成に努める。
- 一、創意ある教育活動を展開し、家庭・地域社会の信頼に応える教育を実現するため、人的措置をはじめとした教育条件の整備・充実を期する。
- 一、「教科書無償給与制度」「義務教育費国庫負担制度」及び「人材確保法」の堅持を求め、教育水準の維持向上を期する。
- 一、学校における業務の精選・明確化等の働き方改革を力強くリードし、新しい時代に応じた魅力ある学校づくりに努める。
- 一、東日本大震災及び原子力発電所事故による被災地における教育活動の正常化や防災教育等のさらなる充実を努め、継続して東北6県校長会が連携・協力する。

令和元年6月27日 東北地区中学校長会

第1分科会レポート

地域との連携・協力による「チーム学校」の実現

岩手地区 天間 保幸 (葛巻中)



発表1 復興・防災教育の実践と校長のかかわり

～各校の特色を生かした復興・防災教育の継続・発展に向けた工夫・改善～
(岩手県大船渡市立吉浜中学校長 村上 誠)

東日本大震災によって甚大な被害を受けた気仙地区の復興教育の実践検証と、今後の推進にあたって、校長としての「チーム学校」の組織作りとかかわりを明らかにしようとする研究の発表であった。

復興教育の3つの教育的価値【いきる】【かかわる】【そなえる】それぞれについて、各校の実践紹介と、その実践による具体的な生徒の成長の姿が報告された。また、復興教育を「チーム学校」としてどのように組織して進めるかについて、校長のかかわりが8つの視点で示された。

東北各県の校長に対し、岩手県が進める「復興教育」の意義と価値を伝えるよい機会であるとともに、県内の各校もその実践例を参考にしながら復興教育の充実を図るうえで大変貴重な発表であった。

発表2 「チーム学校」へつなげる専門性・協働性を高める学校経営を求めて

～ミドルの職能育成と専門スタッフとの協働・連携推進による課題解決～
(山形県山形市立第九中学校長 草刈 竹司)

教育課程の改善等を実現し、複雑化・多様化した課題を解決していくために「チームとしての学校」の組織づくりが求められる今、その中核となるミドルリーダーの育成についての具体的な取組と成果の発表であった。

育成のねらいを「専門性を高める」「協働性を高める」「チーム体制構築」として、「学校経営部」「学習指導部」「生徒指導部」の3部会を組織。校長会主催の各研修会の実施内容やミドルリーダー育成のための校長の具体的なかかわり方、またアンケート結果による具体的な成果と課題が紹介された。また、校長会で講師を招いて「ミドルリーダー育成」についての研修会を開催するなど、その意欲的な取組は、今求められる「チーム学校」の体制づくりに大いに参考になる発表であった。

第2分科会レポート

多様化した学校教育課題に
対応できる教員の育成

胆江地区 鈴木 雅司 (胆沢中)



発表1 多様化・複雑化した学校教育課題に対応できる教員の育成
～校内研修を中核とした体系的な研修の推進を目指して～
(秋田県男鹿市立男鹿東中学校長 木村 守人)

男鹿潟上南秋校長会全10校では、OJTを含めた校内研修を計画的・組織的に年4回実施することに加えて、校長会主体による研修部研修(教科部会)を実施している。意識調査によると、それらをほとんどの教職員が有効な研修だと好意的に受け止めており、各研修の意義を校長が教員に明確に示したことが研修意欲の向上につながったと分析していた。特に後者の研修においては、小中9年間の育ちについて共通理解することの重要性や、複数の専門教科の教員と学びあう貴重な機会となっているといった肯定的な意見が多数を占め、校長のリーダーシップがうまく機能している状況が見て取れた。

最後は、働き方改革の視点を常に念頭に置きながら、学校の実態に応じて研修を推進することの必要性を確認し、研究の成果を共有することができた。

発表2 学校経営改善における人材育成

～新学習指導要領に向けた学校経営の在り方～
(青森県平内小湊中学校校長 奈良原正志)

東津軽郡校長会は、3町1村の全7校が小規模校の特性を生かし、教員の資質や指導力の向上のために、①校内研究の工夫と充実、②生徒指導の三機能を生かした指導力と生徒理解のスキルアップ、③保護者及び地域連携、地域参画による社会性や人間力の育成、④ベテラン教師やミドルリーダーの助言指導によるOJTの充実という4つの研究の柱を設定した。

研究2年目ということもあり、今回の発表は教職員の意識調査が主なものであった。その結果、教員側が一番に求めているのが、新学習指導要領の根幹に当たる主体的で対話的な深い学びによる授業改善に関する研修であり、それは校長の人材育成の方針と合致するものであった。校長は率先して校内外の研修環境を整え、機会を捉えて有効なOJTを実施する必要があることを裏付ける結果となった。

今後は校長が直接行う人材育成の関わり方や、組織で行う際の校長のマネジメント能力やリーダーシップの在り方をより具体的に考察していく必要があるとの課題が提示されたが、発表者の軽妙な語り口により、終始盛り上がりを見せた発表となった。

第3分科会レポート

自他を敬愛し他者と協働しながら
自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

一関地区 熊谷 佳美 (室根中)



発表1 学校不応や不登校生徒に対する対応の在り方
(福島県国見町立県北中学校長 梅宮 賢)

震災から8年が経過し増加し始めた不登校問題に、「校内体制づくり」「関係機関との連携」という2つの視点から課題解決を目指す研究発表であった。

「校内体制づくり」の視点で校内組織の機能の明確化、担当者の明確な位置付け、職員間の連携の強化を図った結果、職員の主体性が高まり、新たな不登校の防止に有効であったという。また、「関係機関との連携」の視点で、SCやSSWrと連携した取組、外部人材の積極的な活用、近隣公共施設の利用、小中の連携の強化、町教委との連携などの多面的なアプローチを推進することで、不登校が解消された事例も紹介された。

子どもや保護者が、他者から「大切にされている」ことを実感できる取組事例が多く、教員のスキルアップにつながる発表であった。

発表2 好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成するよりよい指導の在り方
(宮城県仙台市立郡山中学校長 齋藤 亘弘)

「自己指導能力を育成する生徒指導の充実」のために、「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定の場」の3点に留意し取り組んだ実践が紹介された。

「自己存在感」の育成を目指した事例としては、対面式や合唱祭、文化祭などの行事での「表現活動」を軸とした取組、縦割りの異年齢グループによる「考動議会」の取組などが紹介された。

「共感的な人間関係」の育成を目指した事例としては、前述の2例の他、「ロールプレイ」を組み入れた「いじめ防止プログラム」が紹介され、「自己決定の場」を与え自己指導能力の育成を目指した事例としては、多様な職種を有する地域のもつ教育力の活用による「職場体験」の取組が紹介された。

どの取組も視点を明確にした実践であり大変参考になった。

先輩メッセージ

お家の人との関係づくり

小原 昭徳 様
(前花巻市立花巻中学校長)



38年前、最初に赴任したのが花巻町の金沢小学校でした。教員採用試験は中学校で受験したので、採用が小学校と聞いてとまどったことを覚えています。この頃の学校は、宿直制度はなかったものの、入学式や運動会など行事が終われば、その後、お家の方や地域の方々が学校に残りすぐに酒盛りが始まりました。私は酒が嫌いではないので、それからいろいろな家をまわって飲み、気がつけばどこかのお家で朝ということが何度かありました。こんな調子だったので、教材研究をするわけでもなく、いきあたりばったりの授業を続けていました。こんな授業が続けば、子どもは騒がしくなるのですが、そこは酒の力です。お家の方は子どもに「今度来た先生は、お酒をよく飲むいい先生だ。ちゃんと言うことをきけよ。」と話すので、子ども達もだんだん私をいい先生？と思うようになり、学級は何となく落ち着いていました。この初任の地での経験が、お家の人や地域の人のつながりがとても大切なんだということを教えてくれました。

4年前に花巻市の校長会の研究で、市の教員を対象に「教師にとって大切な資質や能力を3つ選択しなさい」という質問をしました。授業力、専門の知識、児童理解などと並んでお家の人との関係づくりという項目を作りました。結果は、40代以降は、何人かはお家の人との関係作りを選択していましたが、20代、30代は全くありませんでした。これを見て、お家の人と良い関係を結べばそれだけで武器になるのにと、勉強しなかった自分を棚に上げながらそう思いました。

実感として、お家の人との関係がうまく構築できない若い先生が増えているのを感じます。相手の話に耳を傾け懐に入ってしまうことが大切なのですが、その前に頓挫する状況が多々あります。今の時代は、ただ酒を飲めばいいというわけにはいきません。どうすればいいのか、経営者としての大きな課題だと思えます。

先輩メッセージ

自他の命を守れる人に

松村 敦子 様
(前大船渡市立赤崎中学校長)



東日本大震災津波により校舎が全壊。そして、平成29年3月に20メートル嵩上げした同じ場所に、避難所等の設備を兼ね備えた地域防災の拠点としての役割を担う新校舎が完成。その新校舎での教員生活最後の2年間。その中で、いつどこで起きるか分からない災害から自他の命を守れる人を目指し、強い思いを持って防災学習を進めました。

そこでの取り組みの一つであった「津波記憶石の建立」での生徒の言葉が、今でも心の中に深く刻まれています。それは、「避難しようとした時、目に飛び込んできたのは、黒い波に飲み込まれていく赤崎の町でした。絶望としか言えませんでした。でも、それだけではありませんでした。そこには、声をかけ合い、助け合う大人達の姿がありました。その姿を見て『絶望』から『希望』に変わった気がしました。」という、震災当時を振り返って語ったことです。大きな悲しみと恐怖心を抱きつつも、生きるために必死になっていた地域の大人の姿が、当時小学校1年生だった子どもの目に希望の光となって焼きつき、中学生になり「郷土への愛情と感謝」という思いに膨らんでいったのだと思います。それはまた、「どんな状況でもみんなで協力して乗り越えよう。協力すれば、必ず希望が生まれる。震災でうけた傷を希望に変えてしっかりと生きよう。」といった生徒の心からのメッセージでもあると思うのです。

それだけに、年月の経過と共に、震災を知る人が少なくなり、伝えることが難しくなっていると言われる今、生徒達には、こうしたメッセージを記憶と共に繋いでいくためのバトンになることを願っています。そのためにも、率先して自分の命と他の人の命を共に守る行動をとれる人になってほしいのです。このことが、自分の未来を広げ、郷土への愛情を強く持ち続けながら逞しく成長することに結びついていくように思うのです。そして、自他の命を守れる行動をとることが、まさしく、多くの支援に対する感謝の姿でもあるように思います。

終わりに、いつの時も、「子どもたちの笑顔を守り、未来に手渡していく。」という決意を胸に、共に汗を流し、日々励んでおられる現職の皆様方の益々のご活躍を心からご祈念いたします。

先輩メッセージ

地域の人たちとともに

木村 茂樹 様
(前宮古市立重茂中学校長)



教員生活最後の勤務校となった重茂中学校で過ごした3年間は、私にとって忘れることのできない大変貴重な時間であった。

全校生徒が赴任当時は54名、僻地2級の指定を受ける山漁村の小さな学校であったが、それだけに地域の学校として学校行事をはじめ学校の教育活動に対する関心、協力の思いも深い。環境整備作業には生徒数を大きく超える保護者が集まる。地域の祭りには、生徒も職員も授業日として参加、校長も様々な地区行事に来賓として招かれる。

在任中に岩手県小規模複式教育研究会において、鶏舞、剣舞、トド埼太鼓という長年積み重ねてきた伝統芸能の取り組みを教材化した授業を公開させていただいたことが何より印象に残る。生徒たちは毎年、黒崎神社の例大祭で区内を船で巡行、各港で鶏舞、剣舞を奉納、その他、重茂漁協の味祭りでは3年生がトド埼太鼓を披露する。輸送や食事など、参加に関わる様々なきめ細かなご配慮をいただきながら、日ごろの活動の成果を発表させていただく貴重な場となる。当日の公開授業にあたっては、地域に伝わる有形無形の芸能活動を学校教育の中に取り込んでいった先輩諸氏の先見に敬意を表するとともに、学校の取り組みを地域の中に位置づけ、励まし、支援、育んでくれた地域の皆さんの学校や子どもたちに対する大きな期待、深い愛情を職員、生徒、皆で分かち合いたいという思いがあった。

学校教育は、学校が主体性を持って取り組むのは当たり前のことであるが、学校の力だけで成し遂げられるものではないという、これもまた当然のことに気付かされたのもこの3年間であった。

思えば、教諭、副校長、校長と様々な立場で過ごしてきた教員生活、われが、われがと必要以上に肩に力を入れ、結果的に多くの仲間や周囲の人たちの思いや力を十分に信頼することも生かすこともできずに、自己満足、自己主張の教員生活ではなかったか。後悔と反省の思いを今更ながら噛みしめている。

私の学校経営

「行事改善で活力を！」

紫波地区 佐藤 嘉宏 (紫波第一中)



私は本校に着任し2年目となります。昨年度の状況から、様々な課題が浮かび上がってきました。特に、学校行事の見直しは急務であると感じました。

そこで、まず着手したのは、集団・旅行的行事の在り方です。

年度初めの学習や学級づくりの時間を大切にすることや、年度当初の教員の多忙感を解消するために、4月に実施していた修学旅行を9月に実施することを教職員に提案しました。また、修学旅行の内容もパッケージ化が進み、旅行会社任せになっていた内容を改め、教員が生徒の実態に合わせてデザインできるように変えることで、教職員の取組み姿勢にも改善がみられることを期待しています。

また、2年生の宿泊研修も4月から2年生の3学期に変更することとし、宿泊地もそれまでの田沢湖芸術村からグリーンピア三陸みやこに変え、復興教育を加味した宿泊研修を実施しようとしています。

本校は生徒数640人で、学年約200名の生徒がいます。そのため、職場体験を受け入れる事業所を見つけることが困難と判断し、ずっと農業体験を実施してきました。そこで、キャリア教育の根幹をなす職場体験を実施するため、3期に分けて実施できるよう教育課程を編成しました。可能な限り1事業所に1人の生徒を配置し、体験の充実と生徒一人ひとりの責任感を醸成しようと考えています。

さらに、キャリア教育と進路指導が必ずしもリンクしていない現状を鑑み、「キャリア・進路教育」と名称を変え、教職員の意識改革を図ることで、生徒一人ひとりが将来の夢に向かって進路選択できる指導体制づくりを行っています。

新たな取組みにはエネルギーが必要ですが、創造することに、やりがいと活力を感じ教職員や生徒に好ましい変化をもたらしてくれることを期待しています。

新任校長の抱負

新任校長として



釜石地区 及川 正宏 (大平中)

大平中学校は、市街地南側の釜石大観音像が大きく見える国道沿いにあります。築20年以上ですが、吹き抜けて明るく開放的なガラス張りの玄関、教室やワークスペースのレイアウトを変えることが出来る造りの校舎と、海と緑が見える自然に恵まれた環境の大平中学校に、新任校長として赴任して3か月が過ぎました。

この3か月で生徒のすばらしさを感じた場面がいくつもありました。体育祭で披露する大平ソーランでは、ソーラン実行委員がリーダーとなって全校への指導を行いました。場所を分けてのグループ練習から全校がそろっての隊形確認まで、生徒自身の手で行われ、また、生徒会で考えた新種目の練習でも、同じように生徒会執行部がてきぱきと指示を出し、全校を動かす様子を見ました。進め方のみならず、指示内容やアドバイスも的確で素晴らしさを感じさせるものでした。全員の協力と一生懸命さによって夢(目標)を現実にするという思いを込めた生徒会テーマ「夢現」を体現する場面でした。

本校では、復興教育・防災教育として地域との関わりを考えたときに、高齢者との関わりも重要であるという視点から、今年度は、地域の特別養護老人ホームの協力のもとで福祉学習に着手しています。

また、本校には、「剛健不動」の校訓があります。言葉の意味として、「心身が健康で、他の力によって動かされないゆるぎないものをもつ」とも理解できます。生徒が健康で安全な学校生活を送れるような学校、社会に出るためのしっかりとした土台を築くことが出来る学校が、校訓で示された学校の姿の一つではないかと考えています。その示された学校の姿に近づくこと、生徒・職員・保護者にとって、「この学校で良かった」と思えるような学校に近づくために、これまでの伝統と職員の指導力、協力的な保護者や地域の力を大事にしながら学校運営に当たっていきたくと考えています。

新任校長の抱負

出藍の誉れ139の輝き



二戸地区 千田 幸喜 (金田一中)

今春、二戸市立金田一中学校の校長として着任しました。金田一中学校は、藍と関係が深く、校是として「青は藍より出でて藍より青し」、学校教育目標として「進んで学び、出藍の誉れある道を求める実践者の育成」を掲げる全校生徒139名の学校です。

現在、私は、土台となる「健康な学校」の実現に力を入れています。「健康な学校」とは、以前に全国レベルの健康教育学校表彰現地調査の審査員として来県した大学教授から教えていただいたもので、①子どもが明日も登校したいと思う学校、②保護者や地域の方々が明日も子どもを登校させたいと思う学校、そして、③教職員が明日も出勤したいと思う学校というものです。その実現のためには、子どもの意欲を引き出す魅力ある教育活動を展開するとともに、子どもの活躍や教職員の真摯な取組の積み重ねを積極的に発信し、学校、家庭、地域で共有していくことが重要であると考えております。

1学期を振り返ると、大きな行事の一つとして、運動会がありました。私は、閉会式の講評で「自慢の金中生です。令和最初の金中大運動会にふさわしい金中生の姿がたくさんありました。競技に全力で打ち込む姿に感動しました。体をいっぱい使い、大きく、深く、高く、演技する姿に感激しました。競技をする仲間を必死に応援する姿に心が動かされました。円滑に進むように献身的に係活動に取り組む姿に感心しました。素晴らしい運動会をありがとうございました。そして、最後まで子どもたちを見守ってくださいましたご来賓の方々、保護者の皆様、地域の方々、ありがとうございました。今後とも、金中生139名一人一人のよさや輝きを発することができるように、ご指導、ご支援をお願いいたします。ありがとうございました。」と話しました。子ども一人一人が輝いた運動会、そして、子ども、教職員、保護者、地域の方々が一体となった運動会、さらに、勝敗を超え、「する」だけでなく、みる、支える、知るなどの運動やスポーツの多様な関わり方にあふれた運動会をみんなで創ることができました。

今後、「出藍の誉れ139の輝き」を求めて、「健康な学校」を土台に、さらに、聴くこと、一人も一人にしないこと、学び続けることを忘れず、常に「子どものために」を第一に考え、周囲の方々へ感謝しながら、真摯に学校経営に努めて参る所存です。